

フーコーの考古学的方法における主体の歴史性

— 『言葉と物』を中心として —

703-007 千葉伸明 指導教官 柴田芳幸

The Historicity of the Subject in Foucault's Archaeology

Nobuaki CHIBA

目 次

- I 人間的現実への問い
- II 人間の誕生以前
- III エピステーメーについて
- IV ヒューマニズムをめぐって
- V 結論

I 人間的現実への問い

(1) 問題の所在と本稿の課題

今なお、詩を書くことが野蛮であるとすれば、希望が意味するのは、絶望の認識である。ニヒリズムが待ち構えている。しかし、新しい真理によってニヒリズムを乗り越えることはできない。その克服は、新しい価値体系の導入によるのではなく、ニヒリズムそのもののなかで生きる力の存在をあらわにすることによってなされる。

人間性の普遍性も疑問視されている。フーコーは、人間は最近の発明にすぎないと指摘し、同時に人間の死をも予告する。人間の消滅は、フーコーにとって神の死と同義語である。ニーチェが「超人の約束がまず何よりも人間の死の切迫を意味する、そのような点を再発見した」のである。ヒリズムの克服は、人間の死を意味する。

しかし、人間はまだ死んでいない。たとえば、政治の領域において、人間性が種々の論拠となっている。ニヒリズムは克服されていない。ニヒリズムの克服は、ヒューマニズム批判をそのモメン

トとせざるを得ない。そこにおいて、フーコーの歴史学（哲学）が重要な役割を果たす。方法論としての考古学は、「ニーチェの哲学者のように、ハンマーの打撃を加え」ることで、現在そう見ているところのものを破壊する。フーコーの破壊対象は、人間の主体化様式であった。

本稿は、人間主体が普遍的存在者ではないことを確認したあとで、フーコーの現在の歴史学としての哲学がニヒリズムの克服への一つの道具となることを示す。これにより、フーコーが提起する考古学が実践的な意義を持つことを確認できる。

（２）現在なるものの歴史学

フーコーの一貫したテーマは、現在なるものの歴史学である。これが、言説論と権力論の共通の背である。現在として表象されているものの絶対的所与性を疑い、現在として表象されているものが社会的諸力の作用の効果であることを論証する。その点において現在中心主義的な歴史学とは異なる。

（３）先行研究

考古学を主題的に論じているのは、ガッティグである。フーコーの考古学的方法を肯定的に評価し、考古学的方法論的価値を救いだそうとしている。ドレイファスとラビノウは、方法論としての考古学を否定的に評価する。バーナウアーによれば、フーコーの思想の基本的な経験は逃走と脱出であり、フーコーは、自分がヒューマニズムという人間の哲学的監禁のなかにあることに気づいていた。マリエッティは、フーコーの考古学的問いかけ自体がすでにニーチェ的であると考えている。われわれは、ドレイファスとラビノウによるフーコー理解については、次の２点以外は基本的に妥当であると判断する。第１に、考古学的方法論としての位置づけについて、われわれは考古学と系譜学を方法論としては同じ階層にあると考えている。第２に、ニーチェの系譜学との関係の理解については、われわれは考古学自体がニーチェの系譜学的であると考える。

II 人間の誕生以前

（１）ボルヘスの笑いと当惑

『言葉と物』の論理の複雑さは、『言葉と物』の誕生地たるボルヘスのテキストが催させる笑いの中にある。なぜフーコーは笑うのか。

ボルヘスのテキストは、ランゲージュの崩壊を示す。ランゲージュの崩壊は、根本的に了解を不能にしてしまう。フーコーの笑いとは、了解不能なるものを前にしたものの笑いのようにみえる。しかし、フーコーは、笑いながらすぐに問いを立てている。「だがいったい思考するのが不可能なのは何であるのか、どのような不可能性が問題なのか」。

中国の分類法それ自体は思考不可能ではない。西欧の思考は、中国風に思考することができない

としても、中国風の思考について思考することができる。思考体系にはそれに固有の様式がある。思考はつねにランガージュによって秩序化されたエピステーメーをもっている。思考の限界は、この秩序化の様式である。ある思考がこの様式から逸脱すれば、その思考自体を可能にしていた土台が崩壊し、もはやその実践は一つの思考としては認知されえない。あるランガージュのなかで、ランガージュの崩壊を対象として思考することはできるが、崩壊を思考として経験することは不可能なのである。別様に思考することは困難である。この思考の隷属の自覚がフーコーを笑わせ、戸惑わせる。しかし、フーコーは、この隷属から逃れる実践提出する。それがフーコーの哲学である。哲学が別様に考えることを可能にする。

(2) 『言葉と物』の対象

考古学は、社会のなかの暗黙知に関する。考古学が暗黙知のレベルを調査領域としていることは重要である。考古学は、理論と実践という二項対立でなく、この二項対立を可能にするところのものに関心を向ける。そのため考古学は、実践、制度、理論などを同時的に扱うことができる。

暗黙知を成立せしめるところのものがエピステーメーである。それは、理論的領域と同時に実践的領域をも成立させる。しかし、ドレイファスとラビノウをはじめとする（考古学から権力論への）移行論は、エピステーメーをこの考古学的水準において捉えない。

重要な実践的問題の例を一つあげておこう。自由の問題である。エピステーメーが唯一であるとするれば、自由の可能性は棄却される。

エピステーメーはある思考空間においては唯一である。「ある文化のある時点においては、つねにただひとつの《エピステーメー》があるに過ぎず、それがあらゆる知の成立条件を規定する」。思考の自由は存在しえない。

しかし、思考の不自由は、所与の思考空間内においてである。エピステーメーが唯一と言えるのは、「ある文化のある時点において」である。文化や時代が違えば、エピステーメーも異なる。ある社会が唯一の文化しかもたないとするならば、思考の自由はない。しかし、社会は複合的であり、複数の文化即ち複数の思考様式を含む。したがって思考の自由は成立する。

(3) 秩序とランガージュ

『言葉と物』においてランガージュという概念は重要である。それは、秩序化作用を意味する。フーコーは、ソシユール的な概念をそのまま使用するのではなく、考古学的概念として入念化している。

構造主義言語学的な理解とは異なり、ランガージュによる秩序化は主体の能力に還元されてはならない。ランガージュは主体の秩序化能力ではない。そうではなく、ランガージュは、秩序化の作用が主体のうえで行われることを意味する。考古学的には、ランガージュはその秩序化の活動において理解されるべきである。ランガージュ的活動の効果として秩序化を行うのがエピステーメーである。

III エピステーメーについて

(1) 類似

フーコーは『言葉と物』の本論をルネサンス期のエピステーメーの記述からはじめる。この出発点の意義はほとんど無視されてきた。しかし、思想的なコンテクストにおいては、ルネサンス期の記述は近代の参照項以上の意義をもつ。それは、ヒューマニズムの問題に関連する。フーコーは、ヒューマニズム歴史観の不正確さを示す。

一般的にはルネサンス期はヒューマニズムの時代であると考えられている。ヒューマニズム的歴史観は、人間という普遍性を見いだしている。フーコーの批判点は、この普遍性としての人間である。歴史を貫いて存在している人間性はない。それぞれの時代に固有の規定性によって規定される人間があるのみだ。

ルネサンス期のエピステーメーは、類似である。類似を土台としてルネサンス期の諸々の思考は展開される。類似的な秩序においては、世界と思考が同じ水準に属する。世界と思考は、同じ類似という原理によって秩序付けされることになる。人間は、類似の中心点であるという意味においては特権的ではある。しかし、人間が思考の土台とはならない点において、近代的な特権性とは異なる。

(2) 表象性

古典期のエピステーメーは、表象が形成するタブローである。古典期に入ると認識と存在は分離する。ルネサンス期には、言葉や認識、物は同じ資格で存在していたが、古典期には、物の水準と認識の水準は別のものになる。

認識の秩序と存在の秩序が、それぞれ独立に措定される。認識の秩序はランガージュによって設定される。ランガージュは、世界全体を秩序づける作用ではなくなった。認識の秩序においてしか作用しないのである。ランガージュの作用は表象的である。ランガージュは物自体の秩序を表象することによって、思考空間を秩序化する。

(3) タブローの秩序

「侍女たち」の分析の要点は、「侍女たち」においては、表象を形成する諸契機は直接的には示されないという点に存する。表象の主体、表象の客体、表象の解読者などは、その実在性の絵画への投射としてしか表象されないのである。これらの表象性は、重要である。古典期には、表象を成立させる外部的な要素は表象の秩序の中に取り込まれている。

古典期になると、ランガージュは物的な実在性を失い、透明な存在になる。ランガージュの効果としての言語も、その物としての実在を認知されえない。ランガージュの作用は、表象作用においてしか捉えることができない。

フーコーは、古典期のタブロー的空間を規定するためにランゲージュの四辺形という概念を導入する。しかし、四辺形という概念のフーコーによる説明は非常に込み入っている。論述の順序を逆転させたほうが理解しやすい。

(4) 人間の誕生と死

古典期においては表象の透明な作用とされ不可視になったランゲージュの作用を、近代が再び登場させる。近代になると表象の秩序の自律性が失われ、表象の秩序が外部から設定される。超越論的に表象の秩序を設定する次元を導入する。秩序化作用としてのランゲージュが回帰し、可視化するのである。それが人間である。近代においては、人間は、「知にとっての客体であるとともに認識する主体でもある、その両義的立場をもってあらわれる」。

しかし、人間は、その誕生と同時にその死をもたらされる。人間の死とは、人間が思考の対象でなくなることである。それは、人文諸科学によって実行される。人文諸科学の誕生は、近代の成立と同時である。人文諸科学の対象は、「生き話し生産するかぎりにおいての人間」であるが、人間の本性を扱わない。生き話し生産する存在としての人間を知る可能性の条件を分析する。人文諸科学が人間を消滅させるのは、当然である。人文諸科学の対象は、特権的な位置に立つ人間ではなく、むしろ「無意識的なものの問題」である。

IV ヒューマニズムをめぐって

(1) ヒューマニズムの歴史性

一般的にはヒューマニズムの語源はラテン語の *humanitas* に求められる。キケロは人間の理想として生活や文化をあげた。ルネサンス期になると、ヒューマニズムに思想的な重要性が与えられた。

フーコーは、このような一般的理解は、西欧史の発展原理かつ目的としてヒューマニズムを理解するものであると指摘し、ここをヒューマニズム批判の出発点とする。ヒューマニズムは西欧精神の普遍的な要素ではなく、歴史的な構築物である。

フーコーのヒューマニズム批判は政治的でもある。ヒューマニズムは、人間を疎外するものの正反対のように見える。しかし実際は、その反対に機能している。フーコーは、人間性を尊重する思想のいかがわしさに敏感である。根本的にヒューマニズム批判は哲学や理論などの言説の領域に限定されることはできない。抑圧が現実化するその実践においてヒューマニズムの問題を捉えなければならぬのである。

(2) 二つの認識図式

フランス現代思想の対立軸は、構造主義と実存主義である。その認識図式において対立する。実

存主義の認識図式は近代的であるが、構造主義は近代的な認識図式を超え出ている。近代的な認識図式においては、実体が第1次的あり、関係は第2次的である。構造主義は、主体—客体関係を複合的關係態の結び目として理解する。近代的図式において参照項とされた実体は、構造主義においては複合的關係態がイデオロギー的に物象化されたものとして了解される。

実存主義は、近代的な認識図式に基づいている。主体に第1次性を与えているのである。実存主義において主体が実体であると考えするには、少々注意が必要である。サルトルにとって重要なのは、「対自の出現」である。実存主義においては、参照項を主体たる実体として規定することは、正確ではない。しかし、その参照基準として意識の志向性という作用を持ち、それに第1次性を与えている。その意味において、近代的な認識シマに立つ。

主体という主題に関して認識図式における対立の実践的意義を示すのは、ヒューマンイズムの問題である。構造主義は反ヒューマンイズムである。主体は第1次的な実体ではなく、むしろイデオロギー的効果である。他方で、認識図式において、実存主義はヒューマンイズムである。実存主義は意識の作用に第1次性を与える。人間的主体性が諸関係の中心におかれるのである。

(3) サルトルにおけるヒューマンイズム

サルトルは、「実存主義はヒューマンイズムか」と題する講演を行なった。ヒューマンイズムには二つのタイプがある。古典的ヒューマンイズムと実存主義的ヒューマンイズムである。古典的ヒューマンイズムは、不条理のヒューマンイズムである。これに対して、実存主義的ヒューマンイズムは、人間の超越を意味する。人間の超越性と、「人間の世界の中に常に現存しているという意味での主体性」との結合こそが、実存主義的ヒューマンイズムなのである。これがヒューマンイズムであるのは、人間が人間の立法者だからである。

(4) 神の死と人間の死

思想としての構造主義と実存主義の対立点は、主体の強固さそれ自体ではない。神の死というニヒリズム的状况の中で、人間がとるべき位置をめぐる問題である。

ヒューマンイズムの問題は、神の死と相関的である。神の死への対応の仕方は二つある。まず神が死んだあとのニヒリズムにおいて、人間を即位させるという対応がある。人間を価値体系の中心におくことで、ニヒリズムを克服するよう見せかける。これは、サルトルの対応である。

フーコー対応は、これと異なる。神の死と人間の死を同時的なものとする。神の死による超人の要請を人間の死の切迫と考え、ニヒリズムをそのものとして克服しようとする。それは、別の新しい価値体系を作り上げるのではなく、固定化された諸価値を拒否する実践である。ここに、フーコー的な自由がある。

サルトルは、自分の立場を無神論的実存主義と規定する。人間の実存に先立って、その本質を考える神はいない。「神の存在が問題ではない」と考える。神の存在が問題でないとなれば、ニヒリ

ズムの問題が生じる。神の死において価値体系が崩壊する。神不在のサルトルも、同様の課題を持つ。ニヒリズムに対するサルトルの解決策は、価値の主体化である。サルトルにとって価値は超越的なものである。価値づけられた存在は、「自己の存在からの離脱」である。

サルトルは、神の死後、人間をその位置におこうとしている。しかしそれは空しい企てである。サルトル自身が述べるように、人間は無益な受難である。「人間は神を生まれさせようとして、人間としてのかぎりにおいて己を失う」。人間は、価値体系を築こうとしつつ、常に失敗する。これは、永劫回帰である。しかし、永劫回帰により、ニヒリズムを克服できるのは超人だけである。価値体系における人間の中心化が、人間を超えることを意味するのだから、これは逆説である。

フーコーにとっては、神の死がすでに人間の死を意味する。フーコーによれば、ニーチェが神の死と人間の消滅が同義であること、超人の約束が人間の死の切迫を意味することを発見し、「現代哲学が思考することを再開しうる出発点となる端緒を指ししめした」のである。

フーコーにとって、ニヒリズムの状況は徹底的である。価値体系の崩壊の中で自己喪失となるべき人間すら存在しないのである。この徹底的なニヒリズムのなかで、導きの糸となるのは哲学である。哲学は、観想であるよりむしろ自由への実践である。フーコーはニーチェ風の哲学理解に基づきながら、哲学は、真理と関係するのではなく、「今日」が何であるかを診断することであるという。

この診断の道具はハンマーである。ニーチェにとって哲学者はハンマーで現在の諸価値を破壊する。この意味で、ハンマーである哲学は、現在の歴史学と同義である。なぜならば、現在の歴史学は、現在そう見えるところのものの根拠を問うからである。

フーコーの哲学は、ハンマーでもってニヒリズムというパースペクティブ自体を破壊する。価値体系の崩壊の中で、新たな価値体系の構築へ向かうのではなく、むしろ価値体系の再構築へ向かう動きを破壊する。価値体系が主体化＝客体化の空間だからである。

フーコーの哲学は、何らかの価値体系を構築しようとするニヒリズムのレジームの崩壊を試みる。その点でニヒリズムの克服たりえる。

V 結論

(1) ニヒリズムの克服のために

本稿は、はじめ『言葉と物』によりながら人間存在が普遍的でないことを確認した。ルネサンス期、古典期には、思考対象としての人間は存在していなかったのである。人間は、最近の発明品にすぎない。

ヒューマニズムは、神の死というニヒリズムのなかにあって、人間を神の位置におこうとする。価値として目指されるところの即自―対自という理想を、サルトルは神と呼ぶ。しかし、人間存在は即自―対自にはなりえない。人間は、無益な受難なのである。他方でサルトルは、価値を主観的なものとしている。ここに見せかけのニヒリズム克服がある。

フーコーの哲学は、ニヒリズムという問題設定自体を無効化しようとする。フーコーにとって哲学は、別様に考えることである。フーコーの哲学は、ハンマーでもって諸価値体系を破壊することである。ここにニヒリズム克服を見出すことができる。ニヒリズムの克服は、価値体系それ自体を拒否することで、価値から逃れることである。この自由の実践こそがニヒリズムの克服である。

(2) 今後の課題

課題を3つあげておきたい。

第1に、本稿では近代における主体に位置について、ほとんど検討を加えることができなかった。言説のレベルにおいてどのように人間が造られたのかについて、さらに検討する必要がある。

第2に、哲学と権力論との関係である。フーコーにおいては、権力は、権力一知である。主体は、権力一知の生産物である。フーコーの哲学は、ニーチェと同様にハンマーである破壊の作用であるとするれば、ポジティブな諸効果を生産する権力の生産過程において、フーコーの哲学はどのように作用するのか。

第3に、実存主義の認識構造である。本稿では、実存主義と構造主義の認識図式は異なるものの、主体を実体化しないという点では同一であることを確認した。一方の構造主義は関係に第1次性を置き、他方で実存主義は志向性としての主体に第1次性を認める。この両者の違いは、なぜ生じるのか。方法論としての現象学と実存主義の関係を明らかにすることで、実存主義の認識構造がより明らかになる。

主要文献

- Bernauer, James, *MICHEL FOUCAULTS FORCE OF FLIGHT*, Humanities Press, 1990. (中山元訳『逃走の力 フーコーの思考とアクチュアリティ』、彩流社、1994年)
- Boschetti, Anna, *Sartre et « les Temps Modernes »*, Edition de Minuit, 1985. (石崎晴己訳『知識人の覇権 20世紀フランス文化界とサルトル』、新評論、1987年)
- Descombes, Vincent, *LE MÊME ET L'AUTRE QUARANTE-CINQ ANS DE PHILOSOPHE FRANÇAISE (1933—1978)*, LES ÉDITIONS DE MINUIT, 1979. (高橋允昭訳『知の最前線 現代フランスの哲学』、TBSブリタニカ、1983年)
- Dreyfus, Hubert L and Rabinow, Paul, *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, The University of Chicago Press, 1982. (井上克人・北尻祥晃・高田珠樹・山形頼洋・山本幾生・鷺田清一訳『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を超えて』筑摩書房、1996年)
- Didier, Erion, *MICHEL FOUCAULT (1926—1984)*, Flammarion, 1989. (田村俊訳『ミシェル・フーコー伝』、新潮社、1991年)
- Foucault, Michel, *Folie et déraison Histoire de la folie à l'âge classique*, Plon, 1961, Reissued as *Histoire de la folie à l'âge classique*, Gallimard, 1972, (田村俊訳『狂気の歴史 古典主義時代における』、新潮社、1975年)
- Foucault, Michel, *Les mots et les choses*, Gallimard, 1966. (渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学』、新潮社、1974年)
- Foucault, Michel, "L'homme est-il mort?", *Arts et Loisirs* (38), pp. 8—9, 1966, in *Dites et Ecrits 1*, pp. 540—544. (根本美作子訳『人間は死んだのか』、『ミシェル・フーコー思考集成 II』、366—372ページ)
- Foucault, Michel, "« Les Mots et les choses » (entretien avec R. Bellour)", *Les Lettres françaises* (1125), pp. 3—4, 1966, in *Dites et Ecrits 1*, pp. 498—504. (廣瀬浩司訳『ミシェル・フーコー 『言葉と物』、『ミシェル・フーコー思考集成 II』、304-312ページ)

フーコーの考古学的方法における主体の歴史性

- Foucault, Michel, “Qu’ est ce qu’ un philosophe”, *Connaissance des hommes* (22), p. 9, 1966, in *Dites et Ecrits I*, pp.552—553. (金森修訳「哲学者は何か」、『ミシェル・フーコー思考集成 II』、384—385 ページ)
- Foucault, Michel, “Che cos’ è Lei Professor Foucault?”, *La Fiera letteraria* (39), pp. 11—15, 1967, in *Dites et Ecrits I*, pp. 601—623. (慎改康之訳「フーコー教授、あなたは何者ですか」、『ミシェル・フーコー思考集成 II』、453—481 ページ)
- Foucault, Michel, “Sur les façons d’écrire l’histoire”, *Les Lettres Françaises* (1187), pp. 6—9, 1967, in *Dites et Ecrits I*, pp. 585—600. (石田英敬訳「歴史の書き方について」、『ミシェル・フーコー思考集成 II』、430—451 ページ)
- Gutting, Gurry, *Michel Foucault's archaeology of scientific reason*, Cambridge University Press, 1989. (成定薫・金森修・大谷隆昶訳『理性の考古学 フーコーと科学思想史』産業図書、1992 年)
- Kremer-Marietti, Angele, *Michel Foucault Archéologie et Généalogie*, Librairie Générale Française, 1985. (赤羽研三・清水正・桑田礼彰・渡辺仁訳『ミシェル・フーコー考古学と系譜学』、新評論、1992 年)
- Merquior, Jose Guilherme, *Foucault*, Fontana Press, 1985. (財津理訳『フーコー —全体像と批判—』、河出書房新社、1995 年)
- Sartre, Jean-Paul, “La Transcendance de l’Ego: esquisse d’une description phénoménologique”, *Recherches philosophiques* (V), pp. 85—123, 1936—1937. (竹内芳郎訳「自我の超越」、『哲学論文集』所収、人文書院、1957 年)
- Sartre, Jean-Paul, *La nausée*, Gallimard, 1938. (白井浩司訳『嘔吐』、人文書院、1951 年)
- Sartre, Jean-Paul, *L’être et le néant Essai d’ontologie phénoménologique*, Gallimard, 1943. (松浪信三郎訳『存在と無 現象学的存在論の試み』、人文書院、1956 年)
- Sartre, Jean-Paul, *L’EXISTENTIALISME est un humanisme*, Les Editions NAGEL, 1946. (伊吹武彦訳『実存主義とは何か —実存主義はヒューマニズムである—』、人文書院、1955 年)
- Sartre, Jean-Paul, *Critique de la raison dialectique TOME I Théorie des ensembles pratiques*, Gallimard, 1960. (竹内芳郎・矢内原伊作訳『弁証法的理性批判 第1巻 実践的総体の理論 I』、人文書院、1962 年)
- Sartre, Jean-Paul, “JEAN-PAUL SARTRE RÉPOND”, *ARC* (30), pp. 87—96, 1966. (平井啓之訳「サルトルとの対話」、『サルトルと構造主義』、竹内書店、213—238 ページ、1968 年)
- Sheridan, Alan, *Michel Foucault The Will to Truth*, Tavistock Publications Ltd, 1988.
- 今村仁司、『現代思想の基礎理論』、講談社、1992 年
- 箱石匡行、『サルトルの現象学的哲学』、以文社、1980 年
- 丸山圭三郎、『ソシュールの思想』、岩波書店、1981 年